

和歌山県出土の和同開珎

北野 隆亮

1 はじめに

和歌山県における和同開珎の出土事例を集成した結果、7地点・総数74枚以上を数えた。このうち、埋蔵文化財発掘調査での出土事例は2地点・47枚であり、不時発見の出土事例が5地点・27枚以上である。なお、不時発見の1地点に銀銭1枚以上の出土事例がある（北野2006）。

以下、和歌山県における和同開珎について、個別の出土事例について概観したうえで出土状況及び分布のありかたなどを比較検討し、和歌山県における出土傾向などの特徴を抽出することを試みる。

2 和同開珎の出土分布と各事例について

和同開珎の出土分布について、和歌山県北部では、和歌山市で2地点45枚、旧那賀郡で2地点6枚以上の出土例がある。中部では、有田郡で2地点21枚以上、南部では、田辺市で1地点2枚がみられる。

以下、個別の出土事例について概観する。

和歌山県北部における和同開珎出土遺跡について、まず和歌山市の関戸遺跡と太田・黒田遺跡がある。関戸遺跡は古墳時代からの漁村遺跡であるが、奈良時代の遺物が多く採集されている。遺物は須恵器・土師器などの土器類、紀伊国分寺と同型の唐草文軒平瓦の他、和同開珎3枚と神功開寶1枚が表採されている（図1）（宮田1964、森・宮田1978）。関戸遺跡のある地域は奈良時代には加太と共に海部郡に属しており、古代の海辺の村に瓦などの遺物が残されていることについて、奈良時代のいわゆる和歌浦行幸との関わりがあるとの考えもある（大野1991a）。また、本格的な発掘調査は行われていないが、表採された奈良時代の遺物は8世紀中頃から後半にかけてのものが主体であり、海部郡の郡衙であった可能性を検討する必要性も指摘されている（丹野2005）。

太田・黒田遺跡は弥生時代から江戸時代までの複合遺跡であるが、奈良時代の遺構としては井戸や溝などが検出されている。古代銭貨は第3次調査の井戸SE-202から一括して出土したものであり、和同開珎42枚と萬年通寶4枚の合計46枚が出土した（森・白石1969）。この井戸は直径約2m、深さ約3mの規模の円形掘方を持ち、掘方内にクスの巨木を割り抜いて作った井筒を据えたもので、遺物は井戸底から土師器、須恵器、平櫛なども出土しており8世紀後半のものと考えられている。古代銭貨は緞銭状に重なった状態で出土しており、井戸祭祀の目的で沈められたものと考えられている（写真1）（大野1991b）。この遺構・遺物や遺物包含層から奈良時代の蓮華文軒丸瓦や唐草文軒平瓦が出土していることなどから、当遺跡は名草郡の郡衙の可能性があ

ると指摘された（森・白石 1969）。

旧那賀郡では岩出市の岡田遺跡と野田原出土銭の例がある。岡田遺跡は縄文時代から奈良時代までの複合遺跡であり、北側に隣接する西国分Ⅱ遺跡と合わせ7世紀後半から8世紀代にかけての掘立柱建物群や「富集」と墨書で記した須恵器杯などの遺物から那賀郡衙の所在地であると推定されている遺跡である。古代銭貨は1980年の町道建設に伴う発掘調査において出土したもので、和同開珎5枚が土師器杯に入れられ土師器皿で蓋をした状態で検出された。掘立柱建物SB-4の柱穴に隣接した場所に埋設されていたことなどから買地銭であると推定されている（図2）（岩出町教委 1981）。銭貨を入れていた土師器は8世紀前半の時期のものと考えられる。

野田原出土銭は紀の川市桃山町野田原から出土した和同開珎銀銭1枚である。野田原川の右岸旧街道に沿った水田の開墾中に出土したとされる。なお、聞き取り調査では出土時には2枚有り、1枚は破碎し失われたとのことであるが詳細は不明である（北野 2006）。野田原川の下流西約5kmに奈良時代の須恵器蓋付四耳壺蔵骨器が出土した井ノ口火葬墓、北西約4kmには白鳳時代創建の最上廃寺跡などの古代遺跡（和歌山県史編委 1983）があり、野田原出土銭との関連が注意される。

和歌山県中部では、有田郡で2遺跡の出土例がある。有田郡の例は湯浅町の青木古墓と鹿打坂出土銭である。青木古墓は開墾によって偶然に発見されたもので、奈良時代の木炭槨の火葬墓と考えられている。古代銭貨は和同開珎が10枚と銭種不明の18枚以上分の緡銭状融着塊がある。銭種不明のものは観察の結果、和同開珎の可能性が高いと考えられる（北野 2000）。また、銅製の丸軋片1・巡方片1・鉈尾1が共伴したことなどから、「在田郡衙に関係のある役人のもの」と考えられ、近くに「在田郡衙」の存在が推定されている（松下 1993）。

鹿打坂出土銭は湯浅町吉川の鹿打坂の道の脇から昭和21年（1946）に和同開珎が11枚出土したものである（北野 2006）。出土位置の鹿打坂であるが、『万葉集』巻九にみえる大寶元年（701）の文武天皇・持統上皇の白浜行幸の際に詠まれた湯浅周辺の交通路に関わる歌「紀の国の 昔弓雄の 響矢用ち 鹿獲り靡けし 坂の上にそある」から、熊野道を糸我王子から西に分かれ栖原を目指すルートである鹿打坂はこの伝説に起源する命名と考えられており、別の歌「由良の崎 潮干にけらし 白神の 磯の浦廻を 敢へて漕ぐなり」から、行幸に従う一行は、由良に向かうのに、栖原湊から船出して白神磯を廻って由良の湊（現由良町）に向かい海路を進んだことがわかり、栖原湊に至るには鹿打坂を通ったと考えられ、糸我から湯浅に至る後の熊野道はこの段階には整備されておらず、由良までの間は鹿打坂を経由して栖原湊に進み、そこから海路を行くのが幹線だったと推定されている（図3）（高橋 2004）。このことから、8世紀初頭には、古熊野街道は陸路と海路を交えて機能していたルートも存在したものと考えられる。また、この歌にある「由良の湊」に関係すると考えられる日高郡由良町の大引Ⅰ遺跡において古代銭貨が出土している。和同開珎は含まれていないが、関連遺跡としてとりあげる。大引Ⅰ遺跡は海岸砂丘に立地する弥生時代からの漁村遺跡であるが、奈良～平安時代の遺物も多く出土している（図4）。古代銭貨は遺物包含層の最下層から平安時代の遺物に共伴して隆平永寶1枚と長年大寶3枚が出土したものである（由良町誌編委 1985）。この大引Ⅰ遺跡は先にみた『万葉集』の「栖原湊から

船出し、由良の湊まで海路を進んだ」とある「由良の湊」である可能性を考えることができる。

和歌山県南部での出土例は、田辺市稲成町に所在する丸橋丘火葬墓である。丸橋丘火葬墓は開墾によって偶然に発見されたもので、東西 60.6cm、南北 75.8cm、深さ約 50cm の土坑の底部に木炭を厚さ 1cm に敷き、須恵器蔵骨器 1・短頸壺 1・蓋杯 3（図 5）（田辺市史編委 1994）、古代銭貨 20 枚、青銅板残欠 2 などが納められていた。浦宏の報告により出土状況が知られる。遺物は土坑内北隅に蔵骨器を、中央部の東隅と西隅に須恵器短頸壺・蓋杯を 2 組ずつ、中央部の東隅に青銅板 2、中央部の東隅から南東隅に銭貨が 5 枚一組で 4 箇所置かれた状態で出土したものである（浦 1940）。古代銭貨は和同開珎 2 枚と神功開寶 18 枚であり、銭穴に繊維の痕跡がみられることから、5 枚は紙紐で結ばれ一組になっていたと考えられている（写真 2）（田辺市史編委 1994）。5 枚一組の組み合わせは、和同開珎 2 枚と神功開寶 3 枚の一組がみられ、他の例は全て神功開寶である。神功開寶には力功開寶と長万開寶の 2 種があるとされる（田辺市史編委 1994）。出土した須恵器から 8 世紀後半の時期のものと考えられる。

以上、和歌山県における和同開珎の出土分布について、北部地域では紀ノ川流域を中心とした地域で 4 遺跡 51 枚以上の出土がみられ、最も集中する地域であるといえる。その理由としては、紀ノ川右岸を官道である南海道が通ること、白鳳期創建の寺院が集中していること、国府及び国分寺が設置された地域であることなどをあげることができる。次に、中部地域では 2 遺跡 21 枚以上、南部地域で 1 遺跡 2 枚の出土がみられる。出土量的には北部地域に劣るが、単に北部地域に集中しているだけとはいえない状況がある。言い換えるならば、出土地点は官道である南海道に沿った和歌山県北部の紀ノ川流域に集中する傾向があるが、広域かつ全体的にみた場合、散在的ながらも古熊野街道に沿ったルート上に分布を確認することができる。なお、沿岸部に立地する関戸遺跡と大引 I 遺跡の出土例などから、これらの遺跡が古代の港であった可能性を指摘することができる。海上を含む交通路に沿った分布を示すものと考えられる。

3 出土遺構の性格と銭種の組み合わせについて

和同開珎が出土した遺構の種類について、井戸出土例が太田・黒田遺跡で 1 例みられ、詳細は不明ながら和同開珎 42 枚は萬年通寶 4 枚と合わせて井戸祭祀に用いたものと考えられている（大野 1991b）。この例は和歌山県における和同開珎の最大出土数の例でもある。また、火葬墓の副葬品や供献品などの用途に用いられたと考えられるものが青木古墓と丸橋丘火葬墓の 2 例、地鎮に用いられたと考えられるものとして岡田遺跡の 1 例がみられる。

青木古墓については、銅製の帯金具が共伴したことなどから「在田郡衙に関係のある役人のもの」と考えられているが（松下 1993）、出土遺物について、銭貨は熱を受けた痕跡が認められることから遺骸と共に茶毘に付された遺物、帯金具には熱を受けた痕跡がないことから納骨段階に納められた遺物とし、茶毘・納骨という異なる 2 段階の遺物が存在することが指摘されている（川口 2000）。また、帯金具の形態・規模の観察から法量が銅力帯 A-Ⅲ類に相当するとし、被葬者が文官 8 位の人物であったと想定されている（川口 2000）。

丸橋丘火葬墓については、蔵骨器埋置に際して南側から儀礼的行為が行われ、遺物の配置にも

土地を鎮める呪力を期待する意味が想定できるとされ（栄原 1993）、出土遺物は単に被葬者に直接伴う副葬品として一括されるものではなく、北側に蔵骨器を安置した後、土坑の南側において納骨段階で銭貨と土器などを使用する宗教儀礼が行われたのではないかとの指摘がある（小林 1995）。また、納骨に際して地鎮を目的とする儀礼が行われ、それに伴う遺物群と判断されるが、青銅板残欠は蔵骨器に添わせたような出土状況ではないため墓誌とは判断されず、買地券のように埋葬場を鎮める意味ではないかとの意見もある（川口 2000）。なお、8世紀代の火葬墓では須恵器杯・蓋の出土は希少であることから、新来の葬制とそれに関わる儀礼が、古墳時代的な儀礼的要素を残す中で浸透していったと解釈し、和歌山県における火葬の受容過程を検討する上で重要な事例と位置付けられている（川口 2000）。

岡田遺跡の事例について、和同開珎が出土した土坑は土師器杯がぎりぎり収まる大きさであり、近辺に墓坑も検出されていない。土坑は掘立柱建物 SB-4 の柱穴の一つに隣接した場所に埋設されていたことなどから買地銭であると推定されている。掘立柱建物 SB-4 は東西2間以上、南北4間の規模を測るもので、総柱の建物であると考えられており、倉庫の可能性もある。銭貨出土の土坑と掘立柱建物 SB-4 との関係は保留とされているが（岩出町教委 1981）、遺構に切り合いが無く、柱穴に接した位置に土坑が掘られていることから掘立柱建物に伴う地鎮具として納められた可能性が高いと考えられる（図2）。

以上、和歌山県における遺構出土の和同開珎は、井戸祭祀・火葬墓・地鎮などの用途に用いられたものと考えられる。また、これらの遺構は全て奈良時代の時期のものである。

次に、銭貨の組み合わせについて、和同開珎と萬年通寶が共伴する例が太田・黒田遺跡で1例、和同開珎と神功開寶が共伴する例が関戸遺跡と丸橋丘火葬墓の2例みられる。他の事例は全て和同開珎が単独銭種で出土したものである。以上のような和同開珎の出土例での組み合わせについて、黒崎直は近畿の古代火葬墓のうち30数例に和同開珎をはじめとする古代銭貨の副葬を確認し、分析を行っている（黒崎 1980）。その結果、和同開珎単独銭種出土の場合は8世紀初頭～中葉、和同開珎、萬年通寶、神功開寶の3種が単独または相互に組み合わせる場合は8世紀後葉であるなどの年代観を示した。和歌山県出土例を当てはめるならば、岡田遺跡・野田原出土銭・青木古墓・鹿打坂出土銭の4例が和同開珎単独銭種出土で8世紀初頭～後葉、関戸遺跡・太田・黒田遺跡・丸橋丘火葬墓の3例が8世紀後葉の年代観が与えられ、調査所見等との大きな矛盾はみられない結果となった。このことから、和歌山県における和同開珎の出土は奈良時代の遺構等に限られたものと考えられる。

なお、和歌山県では和同開珎から富寿神寶までの5種類の銭種が時間的にも連続して用いられたもの（北野 2000）とみられ、九州の古代銭貨を分析した櫻木晋一が指摘している「和同開珎から富寿神寶までの5種類の銭種、すなわち小型化する以前の銭貨は墳墓・祭祀遺構など意識的に埋納されたものである場合が多い。」といった九州での所見と一致するものであるといえる（櫻木 1994）。また、今回の集成作業において和同開珎銀銭1枚の出土を確認したことについて、2004年の時点で和同開珎銀銭の出土は28箇所、出土枚数は総計47枚とされるが（芝田 2004）、出土地の分布傾向は奈良県の9箇所を最多とし、その周辺域に偏在しており、奈良県に隣接する和歌

山県北部地域での出土は不自然なことではないといえる。

4 おわりに

以上、和歌山県で出土した和同開珎を集成し、出土状況等の分析を行い、出土の傾向等を検討した。その結果、和歌山県における和同開珎の出土は奈良時代の遺構等に限定されていること、出土事例は7地点・総数74枚以上（銀銭1枚以上を含む）の出土を確認することができた。

全国的な和同開珎の出土枚数は2000年に4,892枚（銀銭44枚を含む）と集計されており（鈴木2002）、奈良県が1,967枚（銀銭24枚を含む）と最も多く、畿内中枢地域では3,536枚（銀銭27枚を含む）であり全出土量の72%以上を占める。このことは、和同開珎が古代の都城を中心に流通していたことを示し、畿内中枢部以外の地域で出土量の多いところは石川県の745枚（銀銭2枚を含む）であり、和歌山県はこれに次ぐ出土数であることから畿内中枢地域に隣接する重要な地域であったことの反映であるといえよう。

和歌山県における出土分布について、官道である南海道に沿った和歌山県北部の紀ノ川流域に出土地点が集中する傾向を認めたが、散在的ながらも古熊野街道に沿ったルート上に分布を確認することができた。また、沿岸部に立地する関戸遺跡と大引Ⅰ遺跡の出土例などから、これらの遺跡が古代の港であった可能性を指摘することができ、海上を含む交通路に沿った分布を示すものと推定した。

なお、2006年に和歌山県出土の古代銭貨集成を行った結果、和歌山県内で合計13遺跡、総数212枚以上の古代銭貨出土を確認したが、和同開珎の出土枚数占有率は35%と高比率であった（北野2006）。

※本文中では、教育委員会を教委、編纂委員会を編委と省略した。

〔参考文献〕

- 岩出町教育委員会 1981 『岡田・西国分Ⅱ遺跡発掘調査概報 一町道岡田西国分バイパス線岡田字中線建設にともなう緊急発掘調査一』
- 浦 宏 1940 「南紀丸橋丘発掘の奈良朝墳墓」『考古学』第11巻4号
- 大野左千夫 1991a 「奈良・平安時代の瓦出土地」『和歌山市史』第1巻 和歌山市
- 大野左千夫 1991b 「奈良時代の太田・黒田遺跡」『和歌山市史』第1巻 和歌山市
- 川口 修実 2000 「和歌山県における古代の墳墓 一火葬墓の導入とその後の展開をめぐって一」『紀伊考古学研究』第3号 紀伊考古学研究会
- 北野 隆亮 2000 「和歌山県出土の古代銭貨」『紀伊考古学研究』第3号 紀伊考古学研究会
- 北野 隆亮 2006 「紀伊における古代銭貨」『紀伊考古学研究』第9号 紀伊考古学研究会
- 黒崎 直 1980 「近畿における8・9世紀の墳墓」『研究論集』6 奈良国立文化財研究所

- 小林 義孝 1995 「古代火葬墓における銭貨の出土状況」『摂河泉文化資料』第44号 摂河泉地域史研究会
- 栄原永遠男 1993 『日本古代銭貨流通史の研究』塙書房
- 櫻木 晋一 1994 「九州地区出土の皇朝十二銭」『出土銭貨』創刊号 出土銭貨研究会
- 芝田 悟 2004 「和同開珎銀銭の再検討」『古代の銀と銀銭をめぐる史的検討』松村恵司・栄原永遠男
編
- 社団法人和歌山県文化財研究会 1985 『大引遺跡発掘調査概報』
- 鈴木 公雄 2002 『銭の考古学』吉川弘文館
- 高橋 修 2004 「中世前期の「町場」と在地領主の館 —紀伊国湯浅氏の石崎館とその周辺—」
『地方史研究』第311号 地方史研究協議会
- 田辺市史編さん委員会 1994 『田辺市史』第4巻 田辺市
- 丹野 拓 2005 「瓦からみた寺社・官衙の動向 —平安時代の紀ノ川下流域を中心に—」
『紀伊考古学研究』第8号 紀伊考古学研究会
- 松下 彰 1993 「青木古墓と採集遺物」『紀伊風土記の丘年報』第20号
- 宮田 啓二 1964 「和歌山市関戸出土の蔵骨器」『熊野路考古』第4号
- 森浩一・白石太一郎 1969 「南近畿における前・中期弥生式土器の一様相 —和歌山市太田・黒田遺跡の調査から—」『考古学ジャーナル』第33号
- 森浩一・宮田啓二 1978 「関戸古墳」『和歌山市文化財総合調査報告(1)』和歌山市教育委員会
- 由良町誌編さん委員会 1985 『由良町誌』史(資)料編 由良町
- 和歌山県史編纂委員会 1983 『和歌山県史』考古資料 和歌山県



図1 関戸遺跡出土の古代銭貨拓本（実大）



写真1 太田・黒田遺跡井戸 SE-202
古代銭貨出土状況

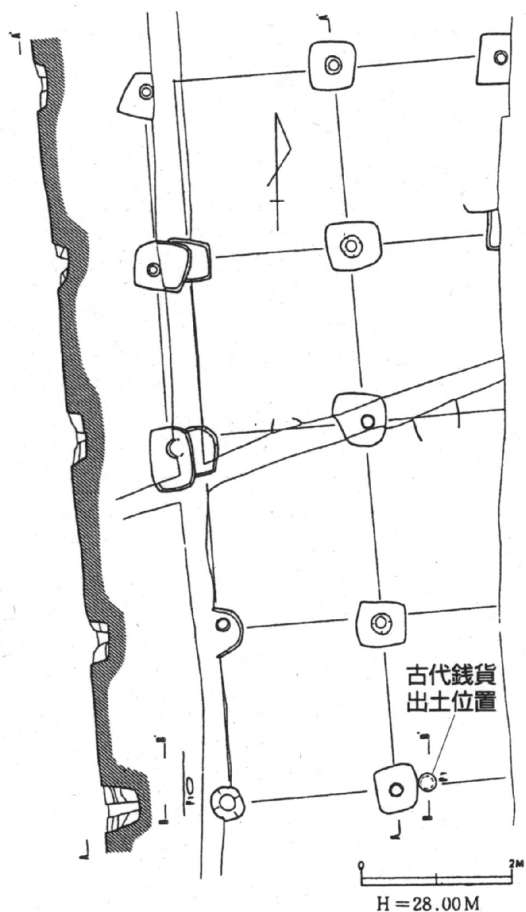


図2 岡田遺跡古代銭貨出土位置図

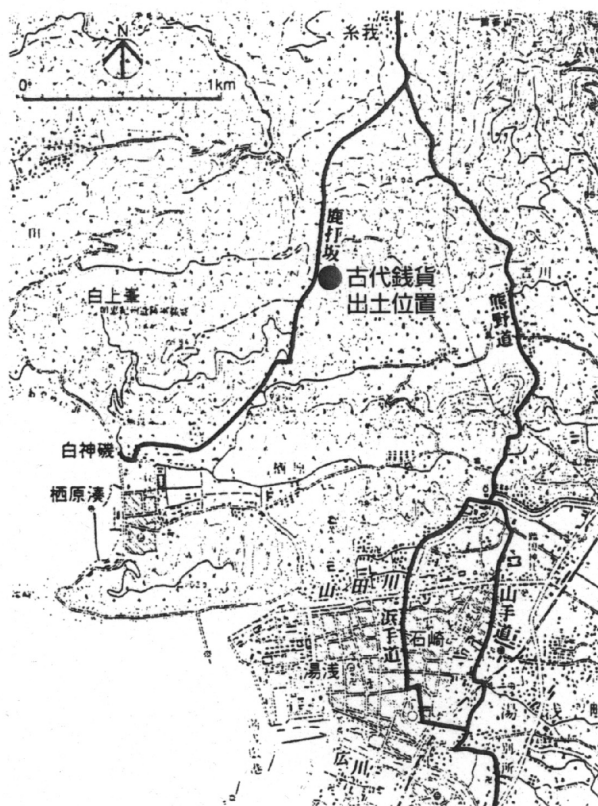


図3 鹿打坂周辺の古道推定ルートと
古代銭貨出土位置

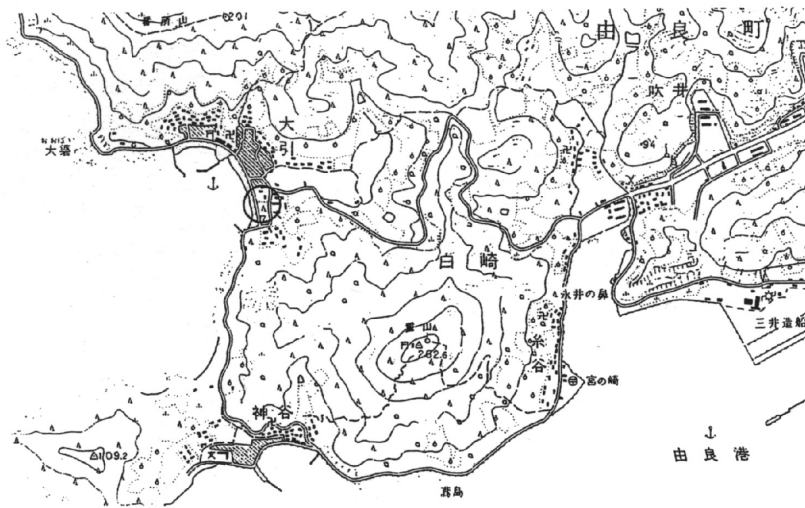


図4 大引I遺跡位置図

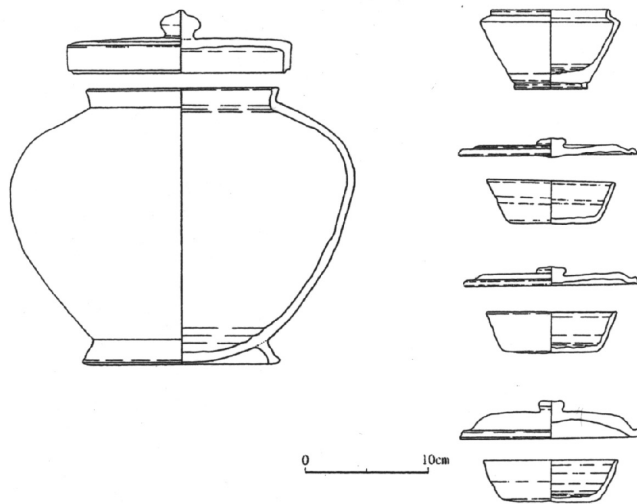


図5 丸橋丘火葬墓出土須恵器

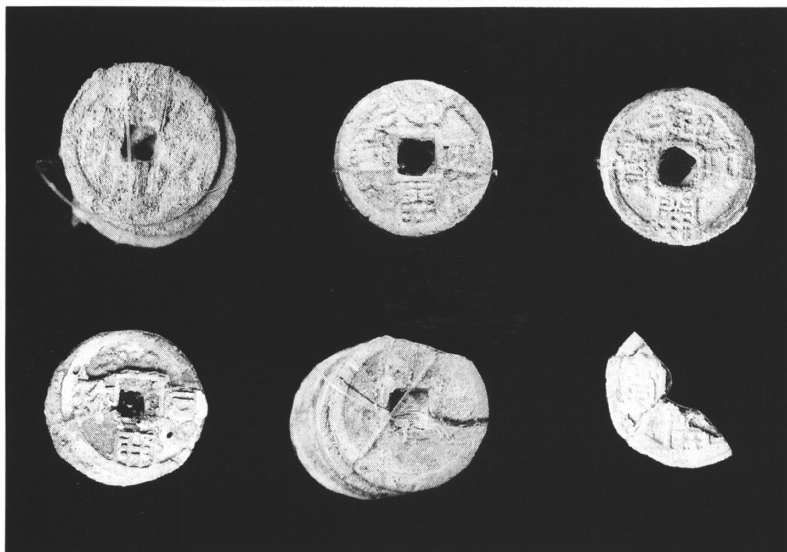


写真2 丸橋丘火葬墓出土古代銭貨